

レジリエンス 3 要因の検証

— 内的作業モデル・気質・地域の特別な他者との関連から —

脊 戸 佑 介

1. 目的

近年、臨床心理学の分野では諸外国を中心に、ストレスフルな出来事の克服を可能にする資源としてレジリエンス（弾力性・回復力）が注目されている。Mastern, Best & Garnezy (1990) によると、レジリエンスとは、困難な環境にもかかわらずうまく適応する過程・能力・結果と定義されている。一方、我が国におけるレジリエンスの研究は未だ数が少なく、統一的な見解はみられていない（小塩ら, 2002）とされている。よって、本研究は、LutharPicchetti & Becker (2002) が提案したレジリエンスの3要因、すなわち家族の要因、個人の要因、地域社会の要因をそれぞれ内的作業モデル（IWM）、パーソナリティの気質、家族以外の重要な他者の存在という観点に集約し、その妥当性を見ることを目的としている。

2. 方法

調査協力者は近畿圏内の大学生、大学院生 321 名（男子 126 名、女子 195 名）。尺度はレジリエンスについては小塩（2002）の精神的回復尺度、IWM については中尾・加藤（2004）の愛着スタイル尺度、パーソナリティの気質については Cloninger (1996) の TCI (Temperament and Character Inventory) の日本語版（木島ら, 1996）を用い、そして、ソーシャル・サポート尺度におけるターゲットを家族以外の重要な他者のみに置き換えて用いた。

3. 結果

結果は因子分析、相関分析、分散分析、重回帰分析によって分析された。レジリエンスについて、愛着スタイル尺度からは「見捨てられ不安」、TCI からは「閉鎖性」、ソーシャル・サポート尺度からは「重要な他者」からの影響が見られた。また、愛着スタイル尺度の「見捨てられ不安」からは TCI の「閉鎖性」と「感情過多」、「親密性の回避」からは TCI の「閉鎖性」と「感情過多」、ソーシャル・サポート尺度の「重要な他者」、TCI の「新奇場面への不安」からは同じく TCI の「感情過多」、TCI の「感情過多」からはソーシャル・サポート尺度の「重要な他者」との関連がみられた。

4. 考察

以上の結果から、LutharPicchetti & Becker (2002) の3要因について、家族の要因を IWM、個人の要因を気質、地域社会の要因を「重要な他者」という概念から調査した結果、統計的に示唆された。すなわち、IWM、気質、重要な他者がレジリエンスの一因を担っており、そしてそれらが互に関連し合っているといえよう。